

チャペルでの奨励（四）一試練は呼びかけ¹

[試練]

わたしの兄弟たち、どんな試練に出会うときでも、
それをこの上ない喜びと思いなさい。・・・
試練を耐え忍ぶ人は幸いです。
なぜなら、その人は適格者と認められ、
神を愛する人に対して神が約束したとおり、
その人に命の冠を授けてくれるからです。

（『新約聖書』ヤコブの手紙、第1章2節および12節、岡部編訳）

今日、昼休みのこのひととき、今年度をもって明治学院大学を卒業して行かれる皆さんとともに、人間の生き方について一緒に考える時を持つて、心から感謝しています。

先ほど朗読していただいた文章では「試練に出会うときには喜びなさい、試練に耐えるひとは幸いである」などと述べられています。「試練を喜べ、試練は幸いである」などといっているのです。それは私たちの常識的感覚に照らせばおよそ、逆ではないでしょうか。なぜなら、試練とは、そもそも私たちの信念や決心の固さが厳しく試されることにほかならず、またその時に受ける苦難に他なりません。にもかかわらず聖書は、それを喜べ、あるいはそれに耐えることは幸いである、とかなり無理なことを言っているようにみえるからです。

聖書は、なぜそのような言い方で私たちを諭そうとしているのでしょうか。今日はその意味を私なりに考えてみたいと思います。

試練に遭遇することの意味

私たちの人生の旅路は、いつも順風満帆ということはありません。誰にとっても必ず山があり、谷があります。色々な試練が訪れてくるのが不可避です。

例えば、学生諸君の場合には、履修単位が不足して進級できない、あるいは就職活動において第1希望の企業に断られる、などがあるでしょう。また、自動車を運転していて事故を引き起こしてしまう、暴力を振るわれる、など予想しなかった事態に直面するとか、父母あるいは兄弟が突然亡くなる、という不幸に見舞われることがあるかもしれません。これらの

¹ 本稿は、著者が明治学院大学 横浜キャンパス・チャペルでの「チャペルアワー」（2012年1月16日）において述べた奨励の言葉です。

事態は、試練の例といえます。では、なぜこれらが試練なのでしょう。

それは、こうした事態の発生により、私たちが従来大切にしているものが脅かされるからです。すなわち、円滑に学年を進級すること、第1希望の企業に就職すること、をわれわれは望んでいます。また自動車を安全に運転すること、そして暴力のない平和な環境で生活すること、さらには家族がみな健康であること、これらを望んでいるわけです。したがって、それに反する事態が発生すれば、われわれはそれを困難や危機が人生に降りかかったと感じ、試練に直面している、と受け取るのです。

こうした事態になれば、気分が落ち込んで生気を失う人が居ます。逆に、事態に反発して荒々しい振る舞いに出る人もいます。しかし、そうした気分になったり、こうした態度をとっても、たいていの場合それで事態を変えたり、改善したりできるわけではありません。

これに対して、もし「今起こっていることには意味がある」という姿勢で向かうことができたなら、どうでしょう。私たちは、それとは全く異なる生き方ができます。「試練はただ苦難や困難を与えるものではない」「今起こっていることには何か意味がある」と考え、試練から何かを学ぼうとすることができることになります。どんな試練も、偶然降りかかって来たもののように見えて実はそうでなく、そこには必ず必然があり、また自分には見えていない深い意味が潜んでいる、と受け止めるのです。「この試練とみえる事態は一体、何を私に伝えたいのか、何に気づけとっているのか」という受け取り方をします。

呼びかけとその受け止めが開く新しい次元

そうした受け止め方を深めてゆくと、自分の何が未熟だったのか、何が不足していたのか、に必ず気づくものです。事態を深く考えぬくならば、私たちを超えた大きな力が私たちにそれを教えてくれるのです。試練は「大きな力からの呼びかけ」、すなわち「声なき声による呼びかけ」(silent calling) と受け止めることができるのです。

このままの生き方でよいのか。新たに始めなければならないことはないか。もっとはみ出して引き受ける時ではないのか。これこそ自分の願いではないのか。

心の目を研ぎ澄ますと、こういった呼びかけが聞こえてくるのです。そして、それに対応すれば、従来見えなかったものが見えるようになり、自分が本当に願っていること、求めていることが感じられるようになります。その結果、従来の生き方や、事態の捉え方にストップがかかります。そして、他人の行動や考えを変える前に自分が変わることの必要性がわかってくるものです。

つまり、自分の人生における使命あるいは天職（英語ではこれらはともに calling 呼びかけを意味しており自らがこの世界に対して尽くすべき働きを意味しています）、を発見することになります。

私たちがこのように、見えない呼びかけに真摯に耳を傾けて行くことによって、私たちの生き方は、本当の意味でシンプルに、そして揺るぎないものになっていくものです。それは、心の深いところで自分が願っていることを求めて生きることを意味するので、いつもすがすがしい気持ちになれます。一方、第三者からみれば、輝いた生き方と映ることになります。

この結果、どんな苦境にあっても、また大きな試練に遭遇しても、そのことを幸せと感じられる心境が訪れるようになります。その一方、そうした態度をとることは、人生そのものを駆動し、牽引してゆく根源の力の発見につながって行くのです。「試練は呼びかけ」という生き方には、このような意味と力が隠されています。そしてそれはとても魅力的な生き方だと私は思います。

私が遭遇した試練

このような「試練は呼びかけ」という生き方が人間にとって本当に意味のある生き方であり、心を軽くする智恵であることを私は自分自身の経験から確信しています。そこで、それを多少お話してみます。

今から約2年半前、2009年10月の国際学部の教授会でのできごとです。その日は、2010年度から2年間務めるべき大学院国際学研究科長（大学院の責任者）を国際学部の教員全員の投票によって選出する日でした。上位2名の決選投票の結果、何とまったく予想外にも、私が選出されたのです。この時は、驚きのあまり、ほんとうに血が逆流するようなショックを受け、これからの2年間は暗黒の日々になるのではないかとまず恐れがやってきました。

なぜなら、私はあと2年間勤めれば定年退職するはずだったので、最後のこの2年間は自分のペースでゆったりと研究および教育にあたれる、と考えていました。このため、研究科長に就くことを考えると、当初の想定自体が根本から崩れることを意味するものだったからです。

そして従来、私は、明治学院大学は学部教育を中心とするリベラルアーツカレッジであるのが望ましく、率直に言えば大学として大学院にあまり力を注ぎ込む必要は無いのではないかと、という考え方をしていました。ところが、大学院研究科長の仕事は、大学院の新しいあり方を考え、そしてそれを充実させて行くことに他ならず、その役職に就くことは従来の私の考え方と正面から衝突するものだったからです。

このため、選出されたとき、一瞬、任務を辞退しようか、という考えが脳裏をかすめました。しかし、思い直した結果、それは直感的に間違っていると考え、任務を引き受けることにしました。しかし、研究科長に選出されたことは、私のそれまでの考え方が否定されることであり、私にとって大きな試練だったのです。

私が試練に対してとった対応とその結果

私はその後、自分がこの役職に選出されたことの意味を色々考えました。まず、同僚教員の皆さんが私にその任務を付託して下さったことの重みです。同僚がこのように信頼してくださっていることを裏切ることはできない、と考えました。

そして、私にこの仕事が任されることは、自分自身に対する何か大きな「呼びかけ」があるのではないかと考えて思いを巡らせました。その結果、幾つかのことに気づいたのです。

第1は、私がこれまで受けてきた大きな恩恵を思い出したことです。私は大学卒業後、幸いにも22年間、日本銀行というとてもしっかりした組織で働くことができ、そこで良い上司、同僚、後輩に恵まれて非常に多くのことを学び、そして多くの知恵を授けてもらう機会を得ました。その後最近20年間は、国内外の大学において自分に合致した仕事をのびのびとする機会に恵まれてきたことも想起したのです。

これらのことをしみじみ思い出すとともに、「多く与えられた者は誰でも多くを求められ、多く任された者は、さらに多く要求される」という聖書の一節（ルカによる福音書、12章48節）が心にしみてきました。換言すれば、秋になって黄金色に輝く「稲穂」がたわわな実をつけて頭を垂れる姿を心の中に描き、そうした稲穂が表しているように恩恵を受け止める必要があることに気づいたわけです。感謝する心、「稲穂の心」が自分の中からわき上がってきた、といえます。

第2は、自分にあと2年間残されていることは、その期間において果たさなければならない私の「人生の仕事」がある、ということに気づくに至ったことです。自分がこれまで受けてきた多くの恩恵を本当に活かすことができるのは正にこの2年間であり、その機会を与えられたのは何とありがたいことか、と受け止めることができるようになりました。

ほんとうに大切なことに対して集中し、そして一心に真心を尽くすこと、すなわち今という時にいのちを込めて人生の仕事を果たす必要があること、このことにもまた気づいたのです。これは今という一点をいのちとして燃える「火の心」を思い出したのだ、といえます。

私が直面した試練に対して、自分の心の奥深いところにはこのような考えが潜んでいることを思い出すことにより、私の考え方と行動は定まりました。すなわち、自分に与えられた新しい仕事は、いやなこと、回避すべきことではなく、むしろいまの自分に与えられたほんとうにありがたい仕事なのだ、という風に考えられるようになりました。

そして、私は大学院の改革に取り組む決意をし、このため、まず大学院検討委員会を新しく立ち上げました。そして学部運営で中核的な役割を果たしてきた見識のある5名の同僚教員にこのことを誠意を持って伝え、そのメンバーになっていただくようお願いしました。その結果、何と全員が即刻そのメンバーになって下さることになりました。大学院の改革を行ううえでは、私があるために割かざるを得ない時間は増え、かなりの週末出勤を余儀なくさ

れるなど、率直に言って並大抵のものではありませんでした。しかしこの2年間、このメンバーの方々の智恵を借りながら色々な面で改革案を練り、それを教授会の皆さんの協力を得て実現することができました。

むろん、今後取り組むべき課題も、なお少なくありません。しかし、試練に際してはそれを「呼びかけ」と受け止め、そして「他人を変えようとする前に自分が変わる」という行き方には、大きな力が秘められていると確信するようになりました。

なぜなら、そうした対応をすることによって、状況に振り回されることがなくなり、また自分の中から力が湧いてくるように思えたからです。そして、忙しいけれどもすがすがしい毎日を送ることができるようになった、と自分では感じています。

結語

試練に出会ったならば、それは自分に対する何かの呼びかけではないか、と受け止める。試練はこのように受け止めることが大切であり、それには大きな力があります。そしてそれは、自分にとって必ず新しい道を拓くよすがとなる、と私は確信しています。「試練は呼びかけ」、つまり試練は人間として成長するための呼びかけである。試練をこのように捉えて自分が変わって行くならば、聖書が述べているとおり、試練は幸いなことであり喜ぶべきことになるわけですⁱⁱ。

私自身、これからも常にこのような姿勢でものごとに向き合っていきたいと思います。また皆さんもそうしてほしいと期待していますⁱⁱⁱ。

ⁱ 稲穂の心、火の心を含む「12の菩提心」の詳細は、高橋佳子『12の菩提心—魂が最高に輝く生き方—』（2008、三宝出版）を参照してください。

ⁱⁱ 「試練は呼びかけ」という考え方は、高橋佳子『Calling—試練は呼びかける—』（2009、三宝出版）から大きな示唆をえました。

ⁱⁱⁱ なお、上記メッセージの音声ライブ録音は、類似の幾つかのメッセージとともに、著者のホームページ上に掲載してあります（下記のURLを参照）。そこでは、上記メッセージのほか、司会者の言葉やオルガンによる讃美歌演奏なども抜粋して録音してあるので、チャペル全体の雰囲気とともにこうしたメッセージをお聞きいただくことができます。また、メッセージの進行にあわせ、関連する写真も追加し、それらが順次自動的に画面にできるようにセットしてあります。

<<http://www.okabem.com/message2/index.html>>